前期（２月４日）用

2020 年 度
一 般 入 学 試 験 問 題

国　　語

（60 分）

（100 点）

注 意 事 項

１．　試験開始の指示があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
２．　国語・英語のいずれか１教科を選択し，解答しなさい。
３．　問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁等がある場合は，手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
４．　筆記用具は，黒鉛筆または黒のシャープペンシルに限ります。
５．　解答用紙に受験番号を記入しなさい。
６．　解答は，必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
７．　試験終了後，問題冊子は持ち帰りなさい。

国語

第1問

次の(1)～(5)の傍線を引いたカタカナの部分を漢字に直し、解答欄に記せ。（配点　10）

(1) 前日提出した意見をテッカイする。
(2) 芸能人を観客がイクエにも取り巻く。
(3) プロチームと選手ケイヤクをむすぶ。
(4) 集客効果をネラった策を打ち出す。
(5) 会場がナゴやかな雰囲気に包まれる。

第2問

次の(1)～(5)の傍線を引いたカタカナの部分をあらわす言葉として最も適当なものを、それぞれア～エから一つずつ選び、その記号を解答欄に記せ。（配点　5）

(1) このデータにはサクイの跡が見られる。
　ア 作意　イ 作井　ウ 作為　エ 作異
(2) 法のモトでの平等を唱える。
　ア 基　イ 下　ウ 元　エ 許
(3) 引退試合でユウシュウの美を飾る。
　ア 憂愁　イ 優秀　ウ 有秋　エ 有終
(4) 仏の輪廻テンセイを信じる。
　ア 転生　イ 天性　ウ 天声　エ 天成
(5) 事故を誘発してジセイの念にかられる。
　ア 自生　イ 自制　ウ 自製　エ 自省

第3問

次の(1)～(5)の意味にあてはまる言葉として最も適当なものを、それぞれア～ウから一つずつ選び、その記号を解答欄に記せ。（配点　5）

(1) 真心を込めていさめること
　ア 忠告　イ 助言　ウ 勧告
(2) ある事柄に基づいて、おしはかって考えること
　ア 憶測　イ 推測　ウ 推察
(3) 社会的な行動についての判断の基準
　ア 模範　イ 規範　ウ 規格

(4) 数量に限りのある物資を一定の割合で渡すこと　ア 配給　イ 配布　ウ 配達

(5) 様子がただごとでないこと　ア 異義　イ 異動　ウ 異様

第4問

次の(1)～(4)の傍線部の読み方を解答欄に記せ。（配点 8）

(1) 将来を嘱望されてこの会社に入った。

(2) そのアイドルは、清廉な人柄で好感を持たれている。

(3) これまで忌避されてきた対処法を用いる。

(4) 引退した政治家が、当時の心境を述懐した。

第5問

次の(1)～(5)の四字熟語の□に入る漢字一字を解答欄に記せ。（配点 5）

(1) 当意即□

(2) 神出□没

(3) 竜頭蛇□

(4) 有□転変

(5) 時期□早

第6問

次の(1)～(5)の□に入る言葉として最も適当なものを、それぞれア～エから一つずつ選び、その記号を解答欄に記せ。（配点 5）

(1) 先生の教えを□に銘じた。　ア 耳　イ 脳　ウ 肝　エ 腕

(2) 身の□に合った振る舞いを心掛ける。　ア 丈　イ 幅　ウ 代　エ 上

(3) うわさ話に耳を□。　ア くわだてる　イ そばだてる　ウ へだてる　エ ようだてる

(4) 納得はいかないが□はかえられない。　ア 目に腹　イ 胸に腹　ウ 背に腹　エ 手に腹

(5) □ごかしの言葉にごまかされない。　ア おこめ　イ おかめ　ウ おほめ　エ おため

国語

第7問

次の⑴～⑸の二つの熟語が類義語の関係になるよう、空欄□に入る漢字一字を解答欄に記せ。（配点　5）

⑴　徒労 ― □駄　⑵　□慢 ― 辛抱　⑶　尋常 ― □通　⑷　音信 ― □息　⑸　冷□ ― 沈着

第8問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（配点　7）

私は「土曜の夜はケータイ短歌」というラジオ番組にゲストとして参加したことがある。リスナーが応募してくる短歌のなかからいいと思うものを選んで、それについてコメントするのだ。そのなかにこんな歌があった。作者は十四歳の女性である。

謝りに行った私を責めるよにダシャンと閉まる団地の扉　　小椋庵月

一読して、面白いなと思った。歌自体も悪くないのだが、それ以上に魅力のポイントがただ一点に集中していることが面白かったのだ。具体的に云うと、それは「ダシャン」の「ダ」である。この「ダ」に一首の命が凝縮されている。もしも、この歌が次のようだったらどうだろう。

謝りに行った私を責めるよにガシャンと閉まる団地の扉　　改悪例

「ダ」を「ガ」に替えただけで一首は死んでしまう。このかたちでは、〈私〉の体験の生々しさが伝わってこない。単なる報告のようにみえる。あたまのなかでするすると組み立てたものをそのまま言葉にしたようでもある。その理由は「ガシャンと閉まる」が慣用的な表現だから、ということになるのだろう。

では、「ダシャンと閉まる」だと何が違うのか。「ダシャン」という響きの奥に、私は次のようなことを感じる。ある日、ある時、なんらかの理由によって、作中の〈私〉は本当に謝りに行ったんだな、そして、扉が閉まって心が震えたんだなあ、と。その理由は「ガシャン」の慣用性に対して、「ダシャン」というオノマトペ（注）には一回性の新鮮さがあるからだ。

もちろん、全ては言葉の上でのことにすぎない。本当に〈私〉が謝りに行ったか、心が震えたか、などの事実は知りようがな

い。目の前にあるものは、(1)五七五七七の言葉の集まりだけなのだから。だが、不思議なことに表現としての新鮮さは、読者にとって、〈私〉が確かに生の現実に触れた証(あかし)のように感じられるのだ。

そんな私のコメントを待つまでもなく、「うん、これは『ダシャン』がいい。リアルだよね」と短歌を読み慣れていない他の出演者たちも瞬時に反応してくれた。そのことも興味深かった。

「ダシャン」と「ガシャン」の間にあるものは、発音や字面の上では微差にすぎない。だが、そのなかに(2)詩的には大きな質の違いがあって、多くの読者はそれを自然に感知することができるのだ。

（出典　穂村弘著『短歌の友人』河出文庫）

（注）オノマトペ…擬声語、擬態語、擬音語。

問1　傍線部(1)「五七五七七の言葉の集まり」は何を指すか。本文中から一語で抜き出して答えよ。

問2　傍線部(2)「詩的には大きな質の違い」があるのはなぜか。解答欄に合うように、文中の言葉を用いて四十字以内で簡潔に説明せよ。読点等も一字と数える。

第9問

次の文章は、中沢新一著『日本文学の大地』の一節である。これを読み、後の問い（問1～11）に答えよ。ただし、出題の都合上、文章を一部変更したところがある。（配点　50）

井原西鶴（一六四二～一六九三年）は大坂の裕福な商人の家に生まれた。といっても詳細は不明で、没して四十五年後に伊藤梅宇が著した『見聞談叢』に「大坂に平山藤五という町人があった」と記されていることから実名は平山藤五だったと推定される。井原は母方の姓らしい。

『見聞談叢』によれば「妻が早く死に、盲目の一女があったけれど、その娘も死んだ。家業を手代に譲って、僧にもならず、頭陀袋をかけて諸国を巡り、俳諧を好んだ。のちに名を西鶴と改めた」という。

俳諧には少年の頃から親しみ、矢数俳諧で才覚を表した。矢数俳諧は京都三十三間堂で通し矢の数を競ったことにならい、時間を限ってできるだけ多くの句を詠む趣向である。西鶴には一昼夜二十四時間に四千句を詠んだ句集がある。

天和二年（一六八二）四十一歳のときに『好色一代男』（注1）を刊行して世に知られる。以後、『好色五人女』『男色大鑑』などの好色物、『武道伝来記』『武家義理物語』などの武家物、『日本永代蔵』（注2）『世間胸算用』などの町人物を著した。

なお、『好色一代男』の成功によって、風俗・人情をつづる「浮世草子」が盛んに刊行されるようになった。

西鶴の作品を、「大いなる換喩の連鎖」と呼ぶことができる。西鶴の作品の中では、ひとつのイメージは①矢継ぎ早に、別のイメージに横つらなりに連鎖していく。ある主題は、垂直の方向に深められる寸前に、ほかのよく似た主題のふところに、横っとびに走り込んでいき、そこにも長くは留まらないで、また別の類似の主題のほうに、横ずさりしていくように、その作品はつくられているのである。その横っとびのすさまじさや煥発ぶりに、私たちはいつも圧倒されるような思いをするのだが、それと同時に、フロイトの研究にもなじんでいる私たちは、そのことで逆に、(1)西鶴という人は、何か大事なことを隠そうとして、こういう書き方をしているのではないか、という印象すら持ってしまうのである。

換喩の連鎖は、何かの見知らぬ不気味な力が、心の機構の中に侵入してこないようにする働きを持っている。(2)換喩（メトニミー）という喩は、部分で全体をあらわしたり（帆を見せることでヨットを表現したり（中略）するように）、あるものをその隣にくっついているもので表現したりする。換喩に対立する隠喩（メタファー）では、たがいによく似たもの同士が接近しあうことによって、ことばの層に、垂直方向の通路が②うがたれるのだけれど、換喩の場合には、それとはちがって、ことばの持っている喩の力が、垂直な方向にことばの層を掘り抜いていったり、そこから心の奥深いところにしまわれていた力が、いきおいよく浮上してきたりするという事態はおこらないようになっている。そこでは、ひとつの意味は、同じ意味層にある別の意味のほうに横のつながりを見出していこうとしているために、そういう換喩が連鎖をつくって、無意識の力のあからさまな立ち現れを防ぐ働きをすることになっている。

⑶そのおかげで、換喩的な表現は、ことばの世界に闊達なスピードをつくりだすことができるのである。隠喩のように、意味の層の垂直方向への削岩をめざしている表現は、深みはあっても、なかなかひとつの場所を離れることができないような、心理の執着をつくりだす傾向がある。ところが、意味層を横にすべったり、とびすさったりすることの得意な換喩の場合には、表現にどこかドライで冷淡なところがあって、ものごとへの執着を嫌って、横へ横へ、遠くへ遠くへ、拡散へ拡散へと向かっていこうという、意志のようなものが働いている。そして、井原西鶴こそ、ことばの持つこのような換喩の働きを、ひとつの思想や倫理にまで高めようとした、まったく希有の作家だったのである。

この作家は、まだ若かった妻に先立たれたとき、その悲しみをまぎらせるため（と、本人は語っていたらしいが）、追善のための独吟一日一千句の興行を思いたったという。一句あたりだいたい四十秒、それこそ矢継ぎ早に、連句を詠んでいくという離れ業に挑戦したのだ。その後、西鶴はこれをさらに発展させて、「大句数（おおくかず）」と呼んで、その数年前に、星野勘左衛門が三十三間堂で達成した、八千本の通し矢（これは「大矢数（おおやかず）」と呼ばれた）の「偉業」の③向こうを張ったわけである。数十秒に一句、という早業を実現するためには、西鶴の前頭葉のニューロンでは、ことばの換喩機構が、フル稼働していたはずである。数人が組んでおこなう連句の場合にも、前の人の詠んだ句のイメージを、換喩的に広げたり、ずらしたり、遠ざけたりすることによって、新しい句が新しい光景をつぎつぎに開いていく。それを、たった一人でおこなおうとするのが、西鶴的な大句数で、そこでは全体として見ると、横すべりし、拡散をめざしていく換喩の働きが、大きな連鎖をつくりだしているのがわかる。

ことばの隠喩的な用法がおこなわれているときには、時間意識の過去へのa遡行ということがおこる。ところが西鶴が挑戦していたような、換喩の高速稼働の場合には、いつも時間意識は、先へ先へと先送りされてしまうので、それこそ記憶をいつくしんだりするとっかかりというものが、失われてしまうのである。そこでは、あらゆるものが、横すべりの移動を強いられ、変化や拡散へと、追い立てられていく。問題は秒数であり、達成の数なのだ。連句はこのとき、原理的に、ひとつのスポーツと化しているのである。

西鶴の亡き妻への追善b供養は、⑷このようにまったくアスレチックな、スポーツ感覚につらぬかれていた。しかし、これを西鶴という芸術家の、愛情にたいする冷淡さをしめすエピソードである、などと受け取ってはならないだろう。ここには、人間精神

のもっと深い層の現実にかかわる問題が隠されている、と私は思うのである。追善とは、生き残った者が、この世で作善をなすことによって、死者の魂の行く末が、よい方向に向かうように願う行為である。ところが、仏教では、この善の集積ということが、いつも「数」で数えられるのである。十万頌般若経の転読をおこなったり、十万回の五体投地に没頭したり、千日かけた回峰行者が人々の尊敬を集めたりと、仏教では、単純な行為をこれでもかというぐらいに反復することによって、善の集積の土台が築かれる、と考えられている。ところで、よく考えてみると、そもそも数というものは、換喩の働きによって、生成してくるものである（1→2→3→…）。そうすると、換喩と数と作善の間には、何か不思議なつながりがあるらしい、ということがわかってくるではないか。

数は、存在しているものを数え上げる。そうすることによって、存在しているということに、たしかな実感をつくりだす力を持っている。だから、この世で作善をおこなうためには、善の行為はできるだけ大きな回数で繰り返す必要があるのだ。それによって、善はこの世にめったなことで崩壊しない、強靭なひとつの力の連続体をつくりだすことができる。換喩もまた、(5)同じような能力を持っている。換喩がことばの世界の中で、力強い横超を繰り返しているうちに、そこには一種ダイナミックで強靭な、運動する連続体の感覚のようなものが生まれてきて、それがバリアーになって、心の機構の内部には、無意識の底から見知らぬ虚無の妖怪が、めったに侵入できないような仕組みがつくられるのである。換喩、数、作善、これらはいずれも、無に引きずり込もうとするものにたいする、抵抗の力を、人にあたえることができる。

『好色一代男』の、日本文学における画期性は、まさにこのこと、換喩と数の権能にかかっているのだろう、と私は思う。西鶴は、日本の物語を、ことばの換喩力によって、改造することに成功したのだ。彼はそれによって、日本人の「恋」の概念に、新しい側面を開いた。『一代男』が描く恋は、徹頭徹尾「換喩的」なのだ。(6)このことは、『源氏物語』が描きだした恋と比較してみることによって、いよいよ鮮明になる。光源氏の恋の遍歴には、小さい頃になくなってしまった母親のイメージが、つきまとっている。彼が紫という少女に、深く執着したのは、その子が母親によく似ている、と感じたからであるし、他の多くの女性と性の交渉を持つときにも、いつもどこかに、この人は誰かに似ているのではないだろうかという意識が動いている。つまり、源氏の恋は、徹底して「隠喩的」なのである。

ところが、世之介のしでかして歩いた恋には、そういう奥ゆかしい隠喩性が、まったくといっていいほどに感じられない。世之介は、恋の対象とする女性を、イメージで判断することがない。この女性は、自分の母親や乳母に似ているといって、恋したりするのではなく、彼はただ、「（女）性的なるもの」というリビドーの連続体の上で、思うさま自由な、横っとびの冒険をくりひろげてみせる。だいいち、この世に、母親に似た女性が三千人も四千人もいてたまるものか。隠喩的であるかぎり、このような「大数の恋」は、不可能なのである。ただ、その人の性の欲望が換喩的に作動するかぎりにおいて、はじめて、業平や世之介の恋は、可能となる。

井原西鶴とは、換喩力の怪物なのである。その力はまず俳諧の世界に注がれて、「大句数」の興行にゆきついた。談林の俳諧というものが、もともと隠喩の力による和歌の世界に対抗して生まれた、換喩力の芸術であったことから、これはしごく穏当な選択であった。しかし、芭蕉とちがって、換喩の軸に極端に走り込んでいった西鶴は、そこでいわば「数に溺れ」、ついには大数の不毛というものに、直面せざるをえなくなったのである。そこで彼は、過激な換喩力を抱えて、物語の世界に踏み込んでいったのだ。西鶴は、日本の物語が恋を中心のテーマとして発達してきたもので、しかもその恋が、自分の性分にはまったく合わない、母性的な隠喩の構造を持っていることを、意識していた。

母性のイメージの周囲に、つぎからつぎと発生してくるのが、隠喩である。西鶴はそれを換喩力によって、突破していく道を探った。そして、その探究がまず生み出した作品こそ、恋の大数化をもくろんだ『好色一代男』だったのだ。この作品が世に出た時代、どうして換喩や数の力が、体制を緊張させるほどの破壊力を持ちえたのか。この問題は、日本の権力に隠された「隠喩の構造」の秘密にかかわっている。またそれは、換喩と数と作善のトリオに、貨幣というものをつけくわえたときに見えてくる、近代の本質にも、触れている。そのことは、『一代男』後の西鶴の作物について考えてみるときに、いずれもっとはっきり見えてくる。（中略）

西鶴は、当時発達しつつあった経済の機構には、ずいぶんと立ち入った知識を持っていたようだが、その経済の発達の条件をつくりだしていた技術の面については、あまり関心がなかったのか、それほど深い認識を持っていなかったように見える。しかし、大阪に商業資本主義が空前の繁栄をとげることができるためには、資本の原始的な蓄積という段階が先行しているはずで、

そこには技術の発達が、決定的な働きをしていた。(7)この点を見のがしていると、c世相文学として、どこかにうまくいかなくなる要因を、抱え込むことになるのではないか、と心配になってくるのだ。

それは、例えば、『日本永代蔵』巻二の「天狗は家名風車」の章などに、はっきりあらわれてくる。西鶴はここで、南紀の太地（たいじ）に、当時大変な発達をとげつつあった、捕鯨をテーマにとりあげている。捕鯨で巨大な財をなした「天狗源内」なる人物を登場させて、その繁栄の様子を活写するのだ。ルポルタージュの部分は、きっと誰かの行き届いた現地取材を利用したのだろう、我が国初の④マニファクチャーとしてつくりだされていた、この捕鯨産業の工程については、なかなか正確な描写をしてみせる。だが、西鶴のとらえ方は、なんと言うか、あまりに可視的な世界のことばかりに目をとられていて、肝心のこの捕鯨と言う技術の本質には、ちっとも踏み込んでいかないもどかしさを、感じさせるのである。

捕鯨の技術が発達することで、黒潮に臨んで生活していた漁師たちは、はじめて、深い海中から、巨大な動物を引き上げて、それを富に変えることに成功した。これは、「天狗源内」の先輩にあたる人々が、海の上でおこなわれる戦争の技術（平和な世の中となって、もうそういうものは無用の長物と化していたのである）を、たくみに平和産業に転換する試みをおこなったからだ。それは、いわば不可視の領域である海中から、可視の感覚的対象である鯨を、引き上げる技術として、発達をとげた。

こういう捕鯨は、(8)当時の技術世界でおこっていたことの本質を、よくあらわしている。技術は、いままで人間の手の届かなかった領域から、有用な物を、引き出す作業をおこなう。つまり、それはヴァーチャルな領域と現実世界との、ちょうどインターフェイス（境界面）の位置にたって、むこうからこっちへの移行を、つつがなく実行する働きをする。そうやってはじめて、元禄時代における、資本の飛躍的蓄積は可能となったのである。

技術が触れているのは、ヴァーチャルな可能世界なのである。それは、神仏の世界と同じように、目で見て、手で触れることのできなかった世界だ。技術はそこへ手をのばして、ちょうど漁師たちがやっているように、釣り針をひっかけて、可視世界への引き出しを実現する。原始的な富の蓄積は、ヴァーチャル領域と物質的現実との間を結ぶ、インターフェイスとしての技術が、実現した。そして、いったんこうやって富がこの世に引き出された後は、今後はそれを貨幣に抽象化して、流通させたり、貯めこんだり、散財したり、あげくの果てに分散零落したり、というような、経済化された人間の悲喜劇が、くりひろげられることになる。

『日本永代蔵』に描かれた、経済人間たちの活力あふれる行動の背後には、じつは鯨が潜んでいた海中と同じような、茫漠たる不可視の空間が広がっているのである。そして、才覚や機転を利用したり、ちょっとした幸運をつかんで、ついには財を築くにいたった人々のほとんどが、人生の重要な転機に、このようなヴァーチャル空間の実在に触れているのだ。「初午（はつうま）は乗って来る仕合わせ」に登場する、泉州水間寺の観音では、銭がいったん観音の差配する神仏の空間に飲み込まれていって、また吐きだされるということがくりかえされている。銭はこの世からいったん消えて、また出てくるのだが、その銭の動きに神仏の霊妙な働きを感じることのできた信心者には、常識では考えられないような、幸運な蓄財が可能になる、とこの話は語る。

ただ、吝嗇（りんしょく）一筋につとめたというだけでは、あるいはただの道徳家には、こういうことはおこらない。富が飛躍的にころがりこんでくるためには、人間一度は、危険をはらんだインターフェイスの領域に、飛び込んでいってみる必要がある。そこは、ただの可能性が物質的な現実に変換をおこす、茫漠たる非合理の領域だ。それが、江戸経済世界のいちばんの深層部にセットされている。そして、資本の蓄積期には、この部分が、社会の表面近くまでせりあがってきて、人々に冒険と活力をあたえていたのである。

しかし、ここにはひとつの大きな問題が、発生する。そもそも技術それ自体には、社会生活でよしとされている倫理が、通用しないのである。技術というのは、言ってみれば、人間の狡智（こうち）をもって、自然の狡智を出し抜くという性格がある（鯨も大変に利口だけれど、太地の漁師は、その上を行く巧みさを発達させた、というように）。もっと言うと、ヴァーチャルな可能世界では、現実世界の倫理や道徳が、根拠をなくしてしまう。そこに倫理観をつくりだしていたのが、神仏への信心で、それはもともと神仏が、ヴァーチャル世界の側から、この現実世界を見守っているという構造があって、その神仏には、人間の社会の倫理などを超えた、もっと宇宙的な根拠の倫理性が宿っていると、人々は漠然と感じていたのだ。

でも、いったん商業資本主義の世界が出来上がってしまえば、すべては貨幣という可視可触の黄金の動きに、左右されるようになる。もともとこの貨幣というものの根源をなしているのは、インターフェイスの領域を渡って、人間世界に富を出現させる生産の活動だったのだけれども、貨幣の流通は、人々の感覚を、そういう領域との接触から絶ってしまう。人々が生きている世界の背後に感じられていた、茫漠たるヴァーチャルな可能世界につながっていく、感覚の通路は閉ざされて、人々は貨幣の動きに

だけ、心をとらわれるようになっていく。

井原西鶴が取り組んでいた世界は、このように、まこと深淵なる矛盾を抱え、西鶴はその矛盾のまっただなかで、文学の創造をおこなったのだ。彼の出発は、俳諧だった。(9)俳諧はこの当時、文学上のもっとも発達したインターフェイス技術だった。和歌はことばでつくりあげられた自然を、自立させてしまっていた。たしかに、それは安定した自然の感覚を与えはしたけれども、もはや自然の内部から、どのような「富」も出現しえない状態に、おちいっていたのである。そのときに、それを突き破るものとして、俳諧が発達した。俳句は、それまでことばがつくりあげる風景の中から排除されていた俗の世界を、きびきびとしたリズムで、大胆に取り入れた。つまりは、海中から鯨が引き上げられるように、ことばによる表現の表面に、それまで価値の世界の外におかれていたものが、一気に躍り出ることを、この俳諧という言葉の技は、可能にしてくれたのだ。

西鶴は、そのインターフェイス技術の、いっぽうのチャンピオンとして、現実世界の背後に、可能世界の膨大なる広がりを感知し、そこからの高速度の価値の引き上げの技で、世間を圧倒してみせていた。そういう精神を散文で表現した『好色一代男』などは、だから言ってみれば、資本の飛躍的な蓄積期の精神、つまり可能世界からの威勢のいい富の引き上げと、その富をまた威勢よく消尽して、もとのヴァーチャル領域に送り返してしまおうとする、豪勢な精神を表現する、大人の寓話なのだ。しかし、海の聖獣たる鯨も、いったん陸に引き上げられてしまえば、油を絞り出すただの巨大な肉の塊と見なされてしまうのと同じように、出来上がった商業資本主義の世界では、世之介的な生き方が触れていた、この世の底部に開かれたすがすがしい無への通路も、閉ざされていく。そして、技術が倫理を平気で乗り越えてしまったのを受けて、今度は、貨幣が、人倫を踏みにじって、d倒錯した世界をつくりだそうとしていた。

『日本永代蔵』の西鶴は、このような複雑に錯綜する矛盾をまるがかえにして、じつはいまにも崩れ落ちてしまいそうな、崖っぷちを歩いているのである。西鶴の前には、技術と倫理と貨幣とが、⑤くんずほぐれつの大立ち回りを演じている。そんな大舞台に、よくぞ日本文芸などという貧弱な装備で立ち向かったものだ、と私たちはむしろ感嘆する。だから、人生の最後にさしかかって、彼がしみったれた庶民の処世ばかりを描くようになったのを見ても、私たちはけっして失望したりはしないのである。ここで、ようやく矛盾が鎮静する。悲しいかな、経済は、しみったれてはじめて、ようやく矛盾の均衡点を見出すことができるものな

のだから。

（出典　中沢新一著『日本文学の大地』角川ソフィア文庫）

（注１）好色一代男…江戸時代の浮世草子。天和二年（一六八二）刊。それまで談林の俳諧師であった西鶴による浮世草子の処女作である。主人公世之介の七歳から六〇歳までの一代記の形をとり、好色の世界にかかわる主人公の見聞体験を描く。

（注２）日本永代蔵…江戸時代の浮世草子。元禄元年（一六八八）刊。西鶴は、さまざまな町人群像を通して、金銭をめぐる人の心のありよう、町人の経済生活の裏面などを活写した。

問１　文中の二重傍線部ａ～ｄの読み方を解答欄に記せ。

問２　波線部①～⑤の本文での意味として最も適当なものを、それぞれア～エから一つ選び、その記号を解答欄に記せ。

①「矢継ぎ早」

ア　続けざまに素早く　　イ　矢を継ぐように慎重に

ウ　流れるように美しく　　エ　鋭い調子で勢いよく

②「うがたれる」

ア　ふさがれる　　イ　貫かれる　　ウ　張り巡らされる　　エ　枝分かれする

③「向こうを張った」

ア　敵視した　　イ　領域に達した　　ウ　飛び越えていった　　エ　対抗した

国語

④「マニファクチャー」　ア　問屋制家内工業　　イ　工場制手工業　　ウ　産業革命　　エ　技術革新

⑤「くんずほぐれつ」　ア　屈したり勝ち誇ったり　　イ　浮いたり沈んだり
ウ　組み合ったり離れたり　　エ　緊張したり弛緩したり

問3　傍線部(1)「西鶴という人は、何か大事なことを隠そうとして、こういう書き方をしているのではないか、という印象すら持ってしまう」のはなぜか。本文中から五十字以内で説明している箇所を探し、最初の五文字を抜き出して解答欄に記せ。

問4　傍線部(2)「換喩（メトニミー）という喩は、部分で全体をあらわしたり（帆を見せることでヨットを表現したり（中略）するように）、あるものをその隣にくっついているもので表現したりする」とあるが、次のうち「換喩」にあてはまらない文はどれか。ア～エから一つ選び、その記号を記せ。

ア　ペンは剣よりも強しと言うだろう。　　イ　月末だと苦しくて、財布のなかに諭吉がない。
ウ　疲れすぎて足が鉛のようになってしまった。　　エ　今月は繁忙期のため手が足りない。

問5　傍線部(3)「そのおかげで、換喩的な表現は、ことばの世界に闊達なスピードをつくりだすことができる」といえるのはなぜか。筆者の考えを踏まえ、解答欄に合うように、文中の言葉を用いて四十字以内で説明せよ。読点等も一字と数える。

問6　傍線部(4)「このようにまったくアスレチックな、スポーツ感覚につらぬかれていた」といえるのはなぜか。解答欄に合うように、文中の言葉を用いて二十字以内で説明せよ。

問7　傍線部(5)「同じような能力」とは何か。最も簡潔に表している箇所を本文中から探し、解答欄に合うように、四十字以内で抜き出して解答欄に記せ。読点等も一字と数える。

問8　傍線部(6)「このことは、『源氏物語』が描きだした恋と比較してみることによって、いよいよ鮮明になる」について、本文の内容を次の表にまとめた。空欄 A ～ D にあてはまる語句として最も適当なものを、本文中から抜き出して解答欄に記せ。

文学作品名	主人公	文学作品の特徴	描かれている恋の概念
『源氏物語』	光源氏	B 的な和歌の世界	D のイメージを求める
『A』	世之介	C 的な俳諧の世界	恋の大数化を求める

問9　傍線部(7)「この点」とは何を指しているか。解答欄に合うように、文中の言葉を用いて四十字以内で説明せよ。読点等も一字と数える。

問10　傍線部(8)「当時の技術世界でおこっていたことの本質」とはどういうことか。それを説明した次の文の空欄 A ～ C にあてはまる語句として最も適当なものを、本文中から過不足なく抜き出して解答欄に記せ。

商業資本主義が繁栄を遂げつつある当時、捕鯨などの技術が、A 領域と、物質的現実という B 的な世界との間を結ぶインターフェイスとして機能し、原始的な C を促したこと。

問11　傍線部(9)「俳諧はこの当時、文学上のもっとも発達したインターフェイス技術だった」とはどういうことか。解答欄に合うように、文中の言葉を用いて四十字以内で説明せよ。読点等も一字と数える。